此書及[illegible]

中むかし北清盛息女六はらの言ずくなに
おいらくれるものうくものの
ゐるとみるまでもいとしきもの
まうるまうるまうるま

おのが心をいたさん物としも思ひわかず
さらにはかなしらひとつとしてゆゑある言
葉づかひもしられずしてよりは只
あるにまかせてかきちらすのみぞ中昔
のやうにて文章しもかくしてむかしをもて
なほざりにのこしおけるものなりけり世と
をもしてはじめてあまたりび源氏物
語などをはじめて文のおもむきをしらばや

此巻は只のまゝにつゞりて我がこゝろのうらみ
はつねにことばたらずのゆゑなりければ
かくしつの言葉づかひをもちゐんとすれど
ありもせでなかなかすべて文のくわしきはまれなり
この言葉は心にうかびたるもかきあらはしがたき
言の心もそのつらなるを知りて思ひ
まことにあるものにありしあるまでかくなり
ぞふかくわれをわするゝまでに古き文言をも見

まうづひをもてそ祈くまんなるまてすぐしてわたる祈
つとそ仏とそ中なむしのまのづわざとふと
板　学　尚　モイ
れをのまの歌中　二行ばかりわたるわとて此の詞をま
トリ
ばらくとすのしをそ出るそよろばのよのづわ
如此
文ぶとのまのまひをの詞なるを言葉も何し
とそのうすぐしていとうめでたうれなう
ムリ
とそのくらいふそ文化の四年せちうの四月
のせ日といふ

源稲彦

一此書をいとうつくしき消息文をよくも見しらぬう
ひまなれど人をもちまにのさるまでまを今世に
きこえれぬ言葉あるを注なくてきこえにくかるべき
所くるをつとこのかたそこる注をはもうつれ注
を先達は法はるをあるをまを吾師は考に
よしかるを政あるまを吾師は考に
たるをあれどこれぞこれぞくを注をにあるほど注者
乃名をもくぐをあるをば

一物がたりは言葉をはなのごとばをはをうひざまをより也
こと異なるをあしてぞうれをもくれをのひざまをいとり

て注をかきたりさしかぎりの所をしてみだりよりふん
なげむべし〳〵ぞ
一本文は今年に異なることおほし。そも師は校本
は甲〜きてよりもしかぎ今年にたづねてもし
ふべし〳〵あ。
一湖月抄などよみだりよりふ。奇なる歌に少しにて元
を奇はよりばよりる歌あしかぎ。コレは点をかきもも
こしかきことみだりに別なることにはよりもよく考
てい〳〵あ。をふすようでそきてしぎるもの
ぐるは点をのくること分まる句讀清濁假名

ぢのひなどそ面やまりるもしどくふせり
一文ごとよりて附をもるせるも本書によりて消息は文
を考合べしむもとめ分り。
一引歌は歌を今まるこの歌を考へるべ。まこ元とより
もしかぎるもは。まこにもの考へもらるべきたぐ
ひも雖えよくもみてこべたる古今後撰などもらる
なのしかぎ考べく出所をもるはとかし。
一本文に「」は元もる歌は書まるも消息文点草等
は地の界分りまこ頭書に○をもるせるもの元文の
大こと分りまこ「」をもるせるもの元分り元は

注なり。

一帥宮を考るすべき先師本居翁の説なり。

桐壺 一丁 ●桐壺だけみこだけ注文 ●更衣はこの注かつる事 帚木 空蟬 夕顔 四丁 ●うすけ蟬君けふこ ●源氏君注文 ●あまさこみけ注文事 ●源氏君注文 ●はなちこさみの注文 花散里 三丁 ●はなちこ君注文 ●少納言ごと事 ●さこ君のの僧都けふこ

末摘花 五十二丁 ●源氏の紅葉賀 四丁 ●源氏のきみけ注文 ●藤壺中宮けふこ ●頭中将注文 かつる事 ●源氏君注文 ●源内侍のけふこ

花宴 葵 四丁 ●源内侍けふこ ●げんじけ君注ふこ ●六条注息 ●源氏君注文 ●源氏君注文事 ●はなちこ君注ふみ ●あさがほの斎院注文事 榊 六丁 ●源氏君注ふみ ●はなちこ君注文 ●はなちこ君注文事 ●中将君けふこ事 ●源氏君注文 ●同君注文 花散里

須磨 八丁 ●源氏君注文 ●はなちこ君注文 ●はなちこ君注ふみ ●王命婦注事 ●げんじけ君注ふみ ●六条御息所注文 ●源氏君注ふこ ●薄雲女院注ふこ ●朧月夜けきみけ注ふこ事 明石 十丁 ●紫上注文 ●源氏君注ふこ ●玄蕃君注文 ●げんじけきみけ注ふこ事 ●はこ ●同君注ふみ ●あこうけ注けこ事 ●源氏君注文 ●同君注文 澪標 十四丁 ●源氏君注文 ●明石けこ事 ●源氏君注ふこ ●紫けこへの注かつる事 ●源氏君注ふこ ●源氏君注ふこ 蓬生

関屋 十五丁 ・源氏君詞文 ・空蟬君ものうの事
撫 同丁 ・源氏君詞文 撫子院詞のうつり
少女 同丁 ・撫子院詞文 ・げんじ君詞のうつり
初音 十七丁 ・あのうめ君詞のうつり
胡蝶 同丁 ・秋好中宮詞文 ・げんじ君詞ふみ
蛍 十八丁 ・無名文詞ふみ ・玉かづらの君詞文
常夏 同丁 ・内侍詞文 ・玉鬘君詞ふみ
篝火 十九丁 ・源氏君詞ふみ ・玉鬘君詞文
野分 同丁 ・大きやぐ詞ふみ ・すゑつむ花詞ふみ
行幸 同丁 ・髭黒大将詞文 ・兵部卿宮詞文
藤袴 廿丁 ・髭黒大将詞文 ・兵部卿宮詞ふみ
真木柱 同丁 ・髭黒大将詞文 ・源氏君詞文 ・玉かづら
きりぎす詞文 ・源氏君詞文
梅枝 廿三丁 ・致仕のおとゝ詞文
藤裏葉 廿三丁 ・ゆふぎり詞文 ・きりつぼ詞ふみ
ゆふぎり詞文 ・髭黒大将詞のうつり
若菜上 廿四丁 ・源氏君詞文 ・朱雀院詞文 ・明石入道
ものがたり ・藤内侍のかつり ・柏木君詞ふみ ・小侍従のかつり

目録

同下 廿丁 ・源氏君詞文 ・朧月夜
君詞のうつり ・朱雀院詞ふみ ・女三宮詞
横笛 廿一丁 ・朱雀
院詞ふみ 鈴虫 同丁 ・泉院詞文 夕霧 同丁 ・ゆふぎり君詞
君詞文 ・落葉宮詞ふみ
詞五事 ・ゆふ雲君詞五事 ・朱雀院詞文 ・雲井雁君詞ふみ
夕ぎりぎりぎみ詞のうつり ・致仕のおとゝ詞ふみ 御法
廿三丁 ・秋好
中宮詞文 幻 匂宮 紅梅 同丁 ・紅梅
井雁君詞文 ・夕ぎり君詞文 ・藏人少将文 竹川 ・藤内侍五事 ・雲
・あねひめぎみ詞のうつり ・藏人少将のふみ 橋姫 廿五丁 ・薫君詞文 ・大君
・故かしぎぎ詞 椎本 廿七丁 ・ものぼふ文詞ふみ ・八宮詞五事 ・薫君詞文
ぎみ詞ふみ 君詞文 ・大君詞
五事 ・薫君詞文 早蕨 同丁 ・梅枝君詞ふみ ・薫君詞文
・たなゝ君詞ふみ ・同丁 ・河内 宿木 廿九丁 ・落葉宮詞ふみ
詞文 ・中君詞のうつり 東屋 陸奥の掌中将文 ・浮舟君詞文 ・浮舟

君はいつてと・はなち君は
はしれ文・薫君法ふみ 浮舟 四十三丁・浮舟君はふみ・右近文・はなち八文
君法文・白文法文・薫君法文・浮舟君文・薫
・ほうふ文法文・浮舟君はふみ 蜻蛉 四十七丁・浮舟君はふ文・ほふふ文法文
・小宰相のふミ 手習 四十九丁・小弁尼はふみ・薫君法ふミ・浮舟君はのつ
のふみ・はは人文・中将乃ふみ・同尼君はふみ 夢浮橋 五十丁・小
・うるせる大将は法文 野僧都

目録

師宮はでまぬの子
にのすし岐落せり
又おかつの仮ふれさ
りがきれ誤なり
で。

小萩の本

○桐壺帝 桐十二丁オ

月日を経すぐれ文衣れ川母也。

ま小人へるすこしうちまぎるるくてるるやとき月日を経すぐれ文衣れ川母也。
こはしきいろへくいとしなびがるまで、わりなきこわざに彫人いは
少なるふ人文いのにはれいりひやり作、文衣みかしこ
ぐくまぬ彫ぐ作をいまこそ彫たのり文衣
ものとうにるずしくくりたまへまでこまこのに
若文を見りきりて奈内しかしこめこと
かくせたまうり
文城乃奈て奈ずに風は言と小萩の本城男ひくう童

春ふかみ花の元社

ねぬなはのうるしうるん君うりも吾ぞまきすれいけるうひうき

○更衣北母陪のうた

同十六ウオ

いくをこのうづけのきぬ花所を侍しぬ所うるおかせぐ

とにたりそて元のうさうひみぐりうづらにあん

あるまに風ふせずして陰の桔しより小萩がとぐしぜんのき

△空蟬君 源氏ものがたりの巻

貞四十七ウ

うけまばかりあかむ城をとこいでこそうろ

□

□小ぐはぬ城をほどうれとはでばぎあるよいのぼのかき

おりひみるうまずぐきまこうにあいはうまうり

△源氏君陪のうた

雅がひを海あさふう

佛云云にうりたう

うりをこそうるをよ

ふる河しきうる

あきうるあぐれ

どう。

□

いけるうひあさや誰ごのいちもきうたいめ

うけせあれをきらきりのとちりはつ城まうこうれさよか

このいうちよきこのはりや。

□源氏君 物ばる秋をと文だぐ一枝逢るひて

同四十八ウ

あしこうりすりふんもしりあつりやとひひけのはず

「つめるほどに見つるもちりもつりやいのにくく」

ほのうのぐ文ず雨ざれを城はずはぎ者はのぐ城はのひと

○同君 紫上の幼ケ

紫廿五ウ

其門祖者はにかれひろ。

ちくはあまてりしみくきれけうまりはにれ花ちひ

行ふるをを城こえあらほこて侍しぐりはりす紙ま

しのゝぶりとめて
わかしき

めくての後はしとハわすれ
ぎらゆもおもひのこ
されしを
ふりハへさせ
あるおもへ
させんかた
なくなむ

師云うたがひハ下へかゝる詞也。

紫上すゝむさま
くてよりの心も
はなしらるゝ
かぬほどのまゝ
事もこのひまに

かたらひこさゆるしくもれしるべせぬ人しれずかなしき
ゆめぢにはいのちうつしけれどあやしやにちかき
さくびきもすぐく

面影も身をはなれずやまがくれ心のおくりとあるく
こしのびよみ閑のぞもうしうめて心迷ひとかり

同廿六丁オ
○尼君御方より
ゆくて七瀬しも人目をしのびにをもふなる
ふりもせずたまへるにまくらのふくなもまよ
難波津にやましくはげにあはれにこのひまく

ちるをかき

幼き人ハ一字で
はかなき出にする
その故うかゝし。
紫上此のさまなる
なるまほしとし。

まむさくえ
あしくいなけれどもちぬるをとゞめけるはぎれ
はかなさぶるしろめさうしきなり
紫上をまもるなんと八ぶらうるめきもさびしいと八源氏君はよのまゝ見さふしろ
めくりむとのかうけくなり、

同廿七丁オ
□まし源氏君より
かの浦ちるちかきまね紀みゆるへまかりしきそま
いれやかるまゝ

あさか山あさくえ人は思はぬよのごく山の井乃のけさるぞ

△又同君より
紫上此のまをものぐしに
浅からりけるゆゑ。

芦間をぶむ舟おと

えもいはぬ

うくせはせもく
ろ八云く山寺にま
り渡るほどに
てさぶらひてあ
はてしさに委
しくかやうのけぬ
やうにと試とも
さいはるく。

かろよりせ
めるかし
あまりうと
は世ものこと
も後とは
ん

同世四丁オ

いちはやさ舟ぞうの一枝よりあまりまこるばせ
舟ぐしのうぬ陸のうぬ八まや

△少納言ぶみ取りて　此文ハ尾君れ送りにて。お納言ぶうけるぶり。

上同

わたを出るきけ　今日えすきのうぶおとれ福氣のままにてふしぶり。
山寺にまこりわるかどにくかうはせめるこの　御
礼　如此
こまりきしせるぶ　あれきりうを中上はんこと
えおこてさせ　と云り。

□小山僧都　尼君ぶくきあひしるし。
伝氏ぶへうるぶ。

同世五丁オ

たちぬる月はせるはそどもまたけるはしるたもるくみし
まくうてせくんのたぶ　北同　道理　尼君ぶくれあひしるく
ぶかるひはひるる

紅三丁オ

○源氏ぶ　院はれ賀試楽に青海波とまひあひく。
習ひ　舞ぶれ試楽に青海波とまひあひく。
いのこれ川んぶけはよこにもしぬみぶりぶくらしぶのうろ
あれはりはこ立ふべくもあるぬ袖うちふ
ムーやまやあるうこと

○藤壺中宮陣　うろうこと

同四丁オ

ぶ人は神ぶくぶ　大方ろハ思ふまあこと
ろ巻ぶ川うくあ　此あるぶ云く

□又源氏ぶより

同十七丁オ

ぶ川ぶ云ぶ出ぶ　ぶ出ぶ

花にさそはれて思ひもよらぬ人に逢ひまゐらせて侍りもべるあり

○源内侍 此二首の詞書の事、と長はまべるべし。

日廿六丁ウ

うしなはれぬるのちはうとひきつれつるあはれなりなどあるべし

日廿九丁ウ

ぬぎかへてうとうとあるはいかなるこころ

○頭中将

君にうくうらもとめぬるたびびとのうらこそ絶ぬる中とは

こうこうこんこそ共ながら紅ちごとあり

□源内侍 源氏君共葵上と同車にて祭見にまゐりたりける文。

葵十三丁オ

けるのやうにやうにものさやうにあるあひだ思ひ神社もとるべけれ

にはかにあふさかのせきもいかゝはせんよそのうらなみ

くやくやくくくくくめてうる淺ゆめ袖のしぬらく山の井の水

ゆるまるけるしめけるしめけるちりけるあるし

△源氏君六条の御息所葵上共わづらひにとりて六条の御息所にて

日廿六丁ウ 病ひとりとりまゐる

日ごろすこしたゆたりさまかはりたるあるいとのけはひにて

雖主人引色うくるうるはしきぬぎ

まことにわすれがたきものにおもほしとりこめたるけはひ

ぬぎ

袖ぬるゝ袖をいかにとこたへまつるこゝろ

此見所のけはひなり

こゝぞいのちぞうきやまれぬこゝろとりはどうある

△又源氏思ひのあまりにまことにたましひ

日十七丁オ

袖ぬれぬるやいのちぞうきやまれぬこゝろとあり

磐ちの河の泡は墓はかなくこそ

あさみどりやいのちぞうきやまれぬこゝろとあり

おもふてやこれ
はふへりをみづから
させね

こぞ思の
宮のみ思ひさまへあま
りてなん

こゝ文段はじめ
宮のきよまはり
にすらぬ
こゝろ文の袖こそ
ある義かし

わがなげきてやさしきれのうちにばのしおこしさやぬる上」なり

れげなけのるにすや此ころしおもひのえまりてえきこゆ　ゑせぬへのしおもかりめすこの式じ知る也れ
えまぬいてこそ葵上おわげしひおもゐけおもて　きこしばげけおもぬるまさまるあさてとまり

○六条御息所 葵上みつるにより源氏君をとふらひたまふ也

日廿九丁ウ
こゝろぬしほどまで御しあるらんや

「人世を哀ときくも露けきにおくるゝ袖を思ひこそやれ」

たぐひなき御ふみ思ふまへあまりてなん」とあり

○源氏君御かへりとて

格別又とある
月日のほどゝて
服中なれハ御文を憚あるべきこゝろなり

こよひはえなむ侍らぬ今くるしき思ひたまへならで

あはれにまきほどなるにて知りあるらんやとて

師云こゝろを申ふ
たくさんに侍らすらも　とのくきいたり
恨のしはしはおもひすて
やまゐをまちに根
ながたまはりけり
いまはおほやけ

神無月いかも時雨
あはれなるかしの
知り袖しほるとあ
きまうつりき

色なりて見らんを
つるはうも候て

このひる
あかし暮
ちてよかし

ると。

「とまる身も消しも同じ露の世に心おくらむほどぞはかなき」

このこと　服者の文故に

よのなかをおもひしらるゝ
きれにてこそ御覧じおくるゝ
とてもかくもなる
たまへはかなきこともおほくなん」とあり

△げんじの君

日廿五丁ウ
「わきて此くれこそ袖は露けれ物思ふ秋はあまたへぬれど」

いつも時雨は」とあり

△桃園院御かへりとて

二ゟ
源氏君これを見まりまいらせ給ひ

おほかたのやまかひて思ひやりきこえて
もの思ふかぎりもえや

あらたかきの中をことゆき

きてさしる
てやまそろ
るなもわ

ましかさやかと
こゝやさ見せる

天照しまふくろ
うしはる神も
思ひ弟神もきく
ろまるの穴

はるく

秋さりになれぬと宿しより志づくるを見いでとぞ家

□源氏見 秋好中宮にまゐりて伊勢に

神九丁オ このけるすゑうしときなへにこそいにつみて神なるそ」

八海まるくにつ御神も人あしきあの別れ市域に

ゆわきふひかるにあのぬらちしけるくの紙にかかり」

□同見 二三日雲林院にまゐりて紫上につかはし侍る御文

同三十一丁ウ

しやと似る侍る道をさぐれ流し人

さめかきよ似ぼりきまさりておもむきし

いなるを

わかたるふもあるじ
深しる ところみあひて

もやうつ
ちらつてさまそろなく

あらくやあしひ篝火と比叡いのは山にみちわく小

おみにうちよけの光をつるさへすめでたき」

淋しくはあのやどりに見れもてよもや嵐も志づんかな

△同見 桂の前院の女房に雲林院

同廿二丁オ

かく旅はてになむ思ひもあくがましに侍るおほぬ

しふにも見あしじのしなどうらこなひくおほまへ

うけるくいのしこけましもあはみの秋は見ゆはゆ

ふたすまうしむのしは今にとたをひきまするものひあく

とのあへさまんをなくやうにとるまでしげにて

思ひやり侍れさせる
ほとゝぎす侍まど
うひかくのみなるむ
なまれてあのぶ
らん

ゆりえさるべきさまのにをあらぬをさぐりてえさるべきこまれ
これぞのやうにあはれなるをおもふこのひさしく

△中将 なれきのつりくし

ロウ
下ぞるくこと給くてましの東北思ひ出まえへ出る
侍世 みまくにも思ひやり宛えさすることとおもく
はづましどうひ給くのこなたとすこしへとどめて
おかのり おまへのきゆふれのそはしぶ
うみおろやいりきあしゆふだすきこんにかけてあのかん
ゆゑあるのさ世にとぞある

□源氏君

七

紅葉のえをり侍るに
錦とふかう
思ひなき
バなん

のひろきまのおほやけ社
むかしくづもれなれ

ちる人もなくて
蕉めるあく山の
もみぢハ花のに
きかけり

しくせるひよりの我めげしきてしらけるはるに文北
あひきれとわかくう給く思ひなくわがうわらる思ひをつ
とあむと思ひたち侍りし日のず我仏まし侍やりて
なあし日ごろにふりわかる紅葉ふりひとの身侍るにきし
くらう思ひさまのふましまでなあむすりよくてはらんせさせ
なくりぐあり

□同 君

つまらせてるのひろきりのごりにてそむげなくづ
きよに侍まし身はくのち歩くはどくまで

あしぶてあのづるはの洞穴もなべて山秋の時雨とや
乃るハけものふるまひ〜ぶ、いのに秋がめけ穴も拾わすま
し待ん」のどこまやあにあわにくり

□同月　駿月若れ君の代もとに須十ようほうひきけん
須十五十ウ　すゝ時はうけ〜ふ
世さえをけごうてとれもはもかあ
とはせ外をぬ見こくわりに男へあごのく今はと世城
くもまばそのにこんにこれ日数ぎまるとまうき恨こかま
同つゝあへはぐるかよけうきえたこびはきこと
にこうはけき

逢坂あきあうぐ井河よえぶらやあづるゝ水紙ぐ
めかりけんと思ふふるうくかんはこのつゝ侍

まるまるありぬる
あんあまるこのうま
ひまきこうく思ひ
ふまんられ行る
時うるつる
ありはとく

○同月　ぐとう東文ときこうふて王令卑に
須十九十オ　けふるも新をるまま　今二度春宮へ参ぬるれ沼うえきえとうる西
るむあまうれうま　ひふまきりて男たるへらまは
ぐるよあぐれ　はのりとわけいあへ　啓
いけの又春れ新の花咲乃む時うし五へる山のはて

○王命婦ぐうりて　東文北作をうれて
同廿一十オ　かはるはうさうにす上報もかうこと
四返きさうて婦　以五ゝ紙ゆせこと
けいし侍りぬ　東文北作はう須十ようをるはとなけのせうて
啓　前
書をいみぐうれ　おまへに老
ほとうこはとはく公うぐれ

花のみやま

きしかた
ゆくさき
うきふし
みぎはまさりてなん

思ふこと多みなれ
ちとひ此川の
岸はまさりても
此れのみ比

けるなるべし
さればこそ萩のうへはまだ此妻は花の都に立いでしのよ
ともしあらば　としあしばはときあ
ものあはれなること　云　くらべやかてそのすぎぬ
みんなにくし　はるはまさしき
△同君　すまのうら。薄雲女院
同此四丁ウ
松しまあまとをやをつり舟のすま此浦人志はるく
五中ハひくしほくし
こえもと待しぬ中によりあはしく
泪にそをふるぐりぬるよせきなるとそう
ころもしてこしかい
らしみぎまさりてなん
○同君　十六すまのうら　朧月夜の御かたく　涙のはしけるけつき

上同
清もしと色にしるれたるひたまへぐらるるにつけてこそ
おりすまの浦のみるめのしほのしまは塩やくあまやいかが思ん
△薄雲女院御のへりこと
同廿七丁オ
ごれぶろきいとし　そのけそみるべし
志ほたるるや我やくらく松嶋にあしふる海士もなげきけむ　松しまのうらは　りうらうこととし
○朧月夜君御のへりこと　つまくし　此のくく
上同
浦にしもくあまがしにつらき心思まゐらくゆるけつのよ方なげき
はをさらるまこと　そはあまりつらしくてえやよぬとく
さらくもくてしこそおもえなんとばのり　云く

うらむとハ思ひさまへられねばこそまよひをうらみけるともわかぬかな

△六条御息所（六条御息所伊勢より源氏の君すまの御すまゐへ）

（同廿八丁左 源氏左遷故）なほうつゝとは、おもひたまへられぬ御すまゐをうけたまはるを、あけぬ夜の心まどひかとなむ、さりとも年月へだて給はじと思ひやり聞えさするにも、つみふかき身のみこそ、又聞えさせむこともはるかなるべけれ

うきめかる、いせをの海士を思ひやれもしほたるてふすまの浦にて

よろづに思ひみだるゝ世のありさまも、なほいかになりはつべきにかとおほかり

いせしまや志ほひの方にあさりてもいふかひなきハ我身なりけり

△源氏君御返し（同廿丁左）

かくて世をはなるべき身と思ひたまへましかば、同じくは志たひきこえましものをなどなむ、心ぼそきまゝに

いせ人の波のうへこぐ小舟にもうきめハからでのらましものを

あまがつむなげきの中に志ほたれていつまですまの浦にながめむ

聞えさせむこともいつとも侍らぬこそ、つきせぬこゝちし侍れ、などぞありける

かくさすらへき身となるべくは、同じく御息所の御供申して伊勢へ下向すべきものをとおもはるゝとなり

きこえさせん事は御息所の又きこえさせん事もはるかなるべけれとあるをうけて也、此再會期しがたきとの心にて湖月抄にもあり。

ひきとめらるるつるで縄

ひくての強のこゑとけば

ゑをきんぢるるちらして

いで吾を人名ぞ
のたまに掛れる
よし

おもひやひ乱れ
わるまにれるく
あまの釣きき
いさうせんとも

きてだよ代ふ
たうるとはまき
るに出あはせ
ましたとげくやう

○又節。君 又華氏忠信ばくしう。まつぜがるにそどに。源氏忠信毎うまわしせてること。

日世八十六 こと付言にひよとめるる法でなんまとゆ下ふん忠きる
らめやすきしきえ八あとがめて」と宮えうつり

○源氏忠信 のてりこと

日 人ありて出くて付うゆもはぐらちすぐるるやすま
むうら船ふいさうせむとまおりはぐりしきやとものり

熟春の日く

△紫 上あのすまの浦やすまの浦やすまの浦やすまの浦。源氏君のすまの
明三十オ 日のすまの浦やすまの浦やすまの浦。

あきるしく浦やうれやまふまうれくおにうきとりる
こうらしてあのがめあはこのまとりくるん

○

浦風やいのにかんおりひかる袖うちぬしのかをあや法

△源氏忠信 のてりこと

日 三十オ 左遷してきまくのうまあをこかしくの
うへすくいえ じまめ此のぎり球うにはこ はそけるこ
さるるあまにばういまはくよ思ひちるるふはこるさり

日 遠世のうし

侍までうぐみを紫上此四字すまの巻に乃ゆ こくこと上とう出とまひ一面系のたれ
南くよるあき球のくれがつこのるれぐうやとうらかる
しまさるくはうまちさはかれたのまくく

はるのにえおひ
うぐ出ひ
うぐ出ひ

浦よりをちに
うぐ出ひ

○

ぬるるき
ちろ

面影のあ
るるよう
きを

浦よりをちに
うぐ出ひ
うぐ出ひ

に思はまでぬ
のはくとやもか
しとと。

○
ゑうに掛つう
みきちにて天
に紫上に新電
ずしてや出を持
そんと掛りて
さまくよるみ
きとと、

あくさすらう
音は爰此やうに
おりはる恵ば
爰此やうに

さめはてぬかぎりいのちにひがことをはかりこのうん

○同 忍あり此上につゐはてけり文

なにちなにちをもてぬ雲なにあるめわびこのすめやどれ

本末をぞ[illegible]ふ四つふにをとぶこのりやありけむ

○明石入道より明石上にのはりて。うけるれうのこと。

しらをもこのうきハぬるこのびく侍ものもとにけるみ

あまりぬるにやさしにこ紙ひをわ侍ぬのし

こさしにあむさてるを

あのむんだなで雲なにあのむるを思ひをれば

○又源氏忍より

せんより 宜五十オ 音きいて作をんの別代きこうをもとこ

ぐよ多みもこ

いがせをもいにをもを城をやむんのれやよやいのいをかみ

人をもの[illegible]ひがをこ」はをこれをびをこ

△同 忍 あり[illegible]入名此娘にあひあひく

紫上ふ其ものとはのを回あ手文。

まあれをりしあとく至思ひいけるをくなでひいるをこ

四十三ウ

をもとや我ひがを人より外るをほがりをにけてうを

四十三オ

四十四オ

ひ侍ものを其

まをむ[illegible]れん

怪をもて人名

[illegible]

くとひをきるん

とこをこのようを。

娘をなをれ

はをれ。

忍をもをもを

人のひがをこ

人にをのをばの

しきる

やよやいのふ

をもをふ人

ををを

まをむとや我ひがをん

より外るをほがりを

をとををを

あををををを

をををふ

うきめかる
うらにでて
あきくんの
そどハおもふ
しあせよ

志ほしほとゝ
しほ〱はなき
が三か見山の神
をうらやまき

○これはまき人給
まぬ心をかり
よけても此本
情のあはくし
さいそあはせ
らるくと云ゆ
るゝくし

まことやあやしうもはかなき夢をこそ見侍りし
かう聞ゆるとはずがたりにへだてなき心の
ほどはおぼしあはせよちかひしことも
て何事につけても
志ほしほとまづぞなかるるかりそめのみるめはあまのすさびなれども

△紫上御かへりこと

同廿四丁オ
志のびかねたる御夢がたりにつけても思ひあは
せらるる事おほかるを
うらなくも思ひけるかな契りしを松より浪はこえじものぞと

うみまつや
さらにもう
しるめる
あとハよるも

うほくかく
そらぶかりて
まくしげさは
ちやく上路しまへ
あく松すくえ
為しくめてよ
うらめまよせ
しくく

□源氏君

同四十三丁ウ
波よるしいつのに
なげきつつあかしの浦のあさ霧のたつやと人を思ひやるかな

○同君 明石上の君の五十日に

同五十五丁オ
うみ松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかにわくらん
心のあくがるるまでなむ猶かくてはえすぐすまじきを思ひたち給ひね
さりともうしろめたき事は
よもとこの

○明石上御かへりこと

ぞよう〻ちやまとく
思ふあとこそあく
なぎもごみ

あまぐもるらん宿

四十五オウ
おのれ〻ぬらまぐれなるけをけかえいのこと
向人ぐのきよのろぶ
城のくなまさろ
はしたはなのもし
はしたはなのもし
すくの白く御人ぐしめ
近日姫君をうしなやすく思たるへてくわぎ
変ぐ白
□源氏君雪みるきとうきあるに自然母北の方の
四十六オウ
たぐいるれろ城いのにけんずん
降参ぞれひ
○同 君
姫君をたこの
ぬらまぐれなるけをけかえいのこと
城のくなまさろ
はしたはなのもし
すくの白く御人ぐしめ
近日姫君をうしなやすく思たるへてくわぎ
変ぐ白
□源氏君雪みるきとうきあるに自然母北の方の
四十六オウ
たぐいるれろ城いのにけんずん
降参ぞれひ
○同 君

十四

さはあがしきりらんや

四十七オウ
一日ハちぎりきこ
わくばよのきこのこぐ
九月晦日の空
ぬうこ
しこの風あり
○空蟬君
四十八オウ
逢坂ぬ
わくん
□明石上
姫君をたこの
明石上
四十九オウ
五十オウ
よろぐのこ

○源氏見

けさやう

おやたちまでうらくいとなんわらくしたる事にて

おやたちもてなしの侍

おもはぬあまがかれ花のさかりをすぐしつるかとばかりうきとぞ

○槿斎院御

秋たてば夢もなごりのさたもなしあるこのかたのたすきやぬぎかへ

槿

○源氏見

師云。源氏見たまへ。はるの物見のおもしろ盛は。すきやぬぎかへ。たまへ。吉野見たまへ。ふるさとの。のこりなく。ふかくこそ。おもふ。侍らん。

師云。源氏見たまへ。はるの物見のおもしろ盛は。すきやぬぎかへ。たまへ。吉野見たまへ。ふるさとの。のこりなく。ふかくこそ。おもふ。侍らん。

かけまやハ川瀬ハ波を立のうら忍みそぎ紙ぬぎ捨て風流

△槿 舟流陽ノ行事

ふるゝ衣ぬ[illegible]

はゝ無常はの[illegible]

□源氏 [illegible]

うくまこゆる武

[illegible]

○未摘花 [illegible]

いでや [illegible]

武て [illegible]

○源氏 [illegible]

[illegible]

や社 [illegible]

□明石 [illegible]

[illegible]

[illegible]

□秋好中宮 [illegible]

明九ウ　吹ハ八ハ

ふけ〳〵ま、ぎにうまぬ〳〵くしこそ

胡蝶に長さうはまぬ

○源氏見　おうしてはきえにけさうをけうめ

四廿三ウ　たこぶしまこのりしはけしきこそ

カヘツテ　こそわすれがまを

うぐいすに人見をりけれ

うちとけてねも見ぬを若人のこゝあるのがほを

むすばゝるゝんかを分くるうをまけまとを

いぶのに云〻

○玉鬘見　御このうへ

四廿四ウ　うけまとをはりぬみぐるのあるうを侍ぶまと

うさをぬとつゝあるに云〻

△兵部卿宮　卯ゑぶの人

四　三ウオ　すうしぶぐのをしまぐ紙をゆるしたるはぐ四ふ

こゝ紙をこのゝはすはけてぐし

△玉　このぐゝれ見　宮まれけまをやとおさまひ

四十ウオ　あらはまをてゝぐあをえをみゆるすしあやめをわのず

なのゝれけるまれわ

あゝめる

ぐ一はぐらき船こ

まをてき行ぐ思

ふ伝紙もぐはあり

と表ぐきゝり上げ

ヒをのゝ

多好の

拾遺哀五

○近江国

常廿五ノ才

あしのきれまをぢの

でのばしばのり

をやすき

郭といへ

むぐちにくう

人と思ひ

いでやし

しにのくで

草わかちひ

むうらにくわか

ねに云

○中納言君

ちうさ

ひさ

△源氏

昨日うへ

ひきぬらんや

△玉のぎちくれたる陣うちてし

口ウ 吹 日ハ

うちかしあさぐるまやこのたびの
光やをもしむかつのかをれこぐもにまむ

□大 文 口十四テウ

六條れたるとぶれたるふしひさわらかくるをうれさび
しげな侍まぢハあれとうしてけうう
をあるをこしうのうをうをうにを
あしでわうりもひあんや寺いめんしまるまほし

□回 玉ぼく 北君代四歩 おくりうちてぼう

口廿二テウ きこうもいこ文いるあしくしまさをしけいもしいび
こあ侍までさうをのをしてくを芝地中あしさのう紙
むがしやくひぐうやとくかもあけまにうけまま
はりあおくあたるすがら紙のけおうくざうん文
いうぐうゆしくまてこのひくこのむ

めうをて言をそゆ仕ぼ我身ぼるをぬのけぶ紙ぶり

○未にけむ茶はまて 玉ぼく 北四家ぎたの乃表くを なをうをすをぼうけ仕文

げるくこ是あるりしくをまうり

□回 玉ぼく 北君代四歩 おくりうちてぼう

口廿二テウ きこうもいこ文いるあしくしまさをしけいもしいび
こあ侍までさうをのをしてくを芝地中あしさのう紙
むがしやくひぐうやとくかもあけまにうけまま
はりあおくあたるすがら紙のけおうくざうん文
いうぐうゆしくまてこのひくこのむ

めうをて言をそゆ仕ぼ我身ぼるをぬのけぶ紙ぶり

○未にけむ茶はまて 玉ぼく 北四家ぎたの乃表くを なをうをすをぼうけ仕文

日廿三丁オ あはせたまふべきこの宰相は侍しねたげにもあらずつれなくまじりけるども
このおまへにまゐりたるもよひ思ひの人のかたちむかへの夜なきかのまゝ
よりもあやしけれど人あまたなりけるはとゆかしきを
なりといふにこそちぎりたまへるぞいみなるべきを
おもひぬあかなりけり

吾身ひとつのみよりいきを世に衣もの数に宣ふとを思へ

日廿四丁 ○源氏君参りて
あやしうおもひはじめけりこよなくもひらきぬべきをとりあはせてまへにくさぐさの紛ひなく
をとこねべきことをよくまねきてとにみるさかぬく

いふ衣まつりかくわからぬもかへすくすかくされもの

梅十六丁 □髭黒大将
おもはくもこころさまにもけしからずはなく
おぼつかなくいとひをせずし長月に命ばかりにて
□兵部卿宮
いふのひるまき世をまかせたまふのかすめはの
数ならぬ光の数ならぬ身をまかせたまふは数ならぬとしは
そめあかなるもすがたなくまかせなくさまの数まかぬ
ぬべくなむ

□舞黒大将

よべくとそのこきしいろ人は侍里のより雪はけき

□兵紅々文

みやまぎにきまちうちのはすかる島はまるかくね

きもと妻にあるうんかさへばる新もみくぶがきて

なぶと

○源氏黒

かきくれくはけはけはけはの黒所よふるさと人をいかにし

けどやはけまにうつく元うあう因ひいでらるく

てくれやう侍る成いのでのおこゆべのうしんるでこあり

○玉のぢれ石陽のうりこ

はのあするはきのちぶに袖ぬまそうるこのうへ

はぞぎあやほどふるころをげるこれるつまく元

まるう侍りりあり

ありたまつり

▲又源氏ゑより

（日世ハ十ウ）おやけのゆめさ月日ゑかとりめる我れ（忘れあること）ものちずる

ゆめ（時）ゆをくゆ（ゆり）とうしきこゆる（ひとり）ゑ（ゆこと）

（けんにをあ一ち海里はなりくまれしし）ろひよゆをはとあるまじう寄侍まぎと思るつい

でゆ一でゆ一ゑ對面れのこうりんをくちをしくれゑ

ひたまつふるどれやめきこうきたまひく

（ひとり）なすすにのひしこのひれ足ぬの紅いの思る人この手

いくぎるりんゆどうまゑ思ぐんふまりあむ

（作）どうこうしたんの三人の手まる作（けんん）と

ゑやまりきとくしとゆ一ゆどと一。

▲舞思大將浄ゆりとて（ひうげ一ゑこうをうて）

（日世ハ十ウ）すゆのくまてくゆ（かいまゑあ一ぬのり武武いぢ方にのハとりの人ゑ

ぐきよゆ一ゆ一ゆ一ぬみ作一きこれどろふくすゆく一しや

ゑゑこくゆまつり（東武れの矢に作ゆ作ゆ矢ハ三ゑ作ゆまゆ了城ゆ一こまりたりとうしし

ゆ一ゆ一ぬ作ゆ一きゑ作ゆ機嫌ゆ一きくゆゆ一ゆ一力のゆく。

□致仕れくぐ雪井戸ゆゆ一ゆ一ゆ一

吾宿のふぢ咲くまたうのまに郭公やまさぬ春はなごりかな

□夕霧君（源氏井の橋ゆるされるひてのけ文。）

日十二丁

はるばるとうしろ髪をかけしまに中こしぐ田人まくらく

みれやどる秋ぞ人ぬんにまるこまをとてぬべき秋

●同君（惟光の娘蔵内侍ばかり。祭のつかひにいでたちの所にかよふ。）

日十六丁オ

なほ世にうやけしのぎしよかつみをいとはぬめくまでえな

つにけるこの秋あさるまし」とあり。

●蔵内侍乃ろうこと

師云恃士おをよく書まるものなれば、君ろ〜〜ろ〜〜ろ〜〜そこ沢のこはこせ文字風のこまかう〜〜。

日ウ

かぎりて元浮世ばかりる事はなく八のほ〜〜秋をうし人

やまるるんはうせるるしで思ふ〜〜字えてり

□源氏君（女三宮へまゐり。）

惟士

菜上四十五ウ

けやれ書にてうちあやまりそいとなやまし〜〜侍まぶ

んやすま方にため〜〜侍らとあり。

□朱雀院（雅楽を六条院にわ〜るわきる。）

日四十九丁ウ

女三の巻

秋さ月あ人はうちう

知かにしてもあくわきまへうきこと

ちむ秋つみるくれ

知のうまにはうまつまきりのにはぎ

女三の巻上の巻伯母し

ねまよべきあもや

六条院にうちうすきこと

妹姫のんかくうしろをあへたば

師云恃士おをよく書まるものなれば、君ろ〜〜ろ〜〜ろ〜〜そこ沢のこはこせ文字風のこまかう〜〜。

□明石入道（明石上にまゐらせ。遺言せのこりの事。）

旧七十九丁オ

こゝに世にあるがほにくまれまゐらせじ世界に対面せぬ世界に対面せぬ世界にあるものと思ひうけ侍りとて世にあるこのはかなくたのもしきこと侍りとて思ひ

世中のうちにめぐりひ侍りつるこゝ

ろ（しるべきこゝろ）さへ（しるべきこゝろ）侍りとて（たゞひのる伝も）思ひ

あはせ（借字文なし）ぬ（借字文なし）ぶ（借字文なし）こゝの（借字文なし）れ（借字文なし）ぶ（借字文なし）こと見給ふ（益無）ものめ（借字文なし）せいとるいうて

念仏（念仏）えけ（念仏）ば（念仏）ふ（念仏）すう（念仏）やうにおくるゝてゐん（オホン消）ぜう

息（息）こゝ（息）を（息）ぬ（息）ぬ（息）ぬ

須弥山
すくなき山にて右はまにさらげ寄る山はたは右の方
日はひくうりさやのにさーいぞく世にてしすらぶそのの
らを山はしえはうのげまうくまてうはひくうにあ
らぐ山をぞひろまし海まうこのべはきてくちさき舟
にのりて西はうに出さしてこぶりとるぶ見侍
爰さめくあしさうこのずかぬ方にまはもと
うろ出来るぐのしく付どにつけこのさるいのめ
きこと城ぞまちいぞひとんはうちにおりひ侍り
城かはけはうり明石上はうる社紛ひまーこるこうくれ方

ちかうおよぶぬ方
ホ思ひ〻まへ兼て
るんかる道まお
ゆふき
はうよ〻

はけ〻城見侍りしに是まう内侍教はうろ城見る
ホにて爰城伝ずべきこと多く侍りしのぞいやも七
きみ〻〻〻はうちにそのてしのあく思ひうぶよ
をりしうぐちの身に思ひあまりてさ
てなんいのる道にはかりぬ方にはりひ紛べのを
ことにしばら侍りて老れるこ〻に立こうしと
思ひとぐめてし浦にとーは侍りしほどそわの忘
城をはむことにはりひ所ろ侍りしのばるんんひ
とにおりくれ形をたて侍り、をこのうれひ

西のそ　十方佛のほめたまへる九品のうへのぞみ

むかふる程あるまじき山の末にてつとめえべらん

蓮をまもりえんまきき

水草きよき云ゝ

花きに云寅僧正ぶ八時のこと

らのに男ひけごと時にあひ行ふ若さこそ國ゝ（是八の君のはつとしの行の八幡と）

（氣きがん）ありたるひとくねのひらたるえんよにすこよれ

（願をまこさろ）

（清ヤシロ）社をけ　めはてゝ中あへさこに何事ゝ式のう

たごひ侍ゝ此ひとうれたりひとのき世をこの俗

（姫君東まに条辺なる所に若人の侍るを八幡の社と祈ひ）

侍ぬきごはるのに西ゝ千方住ゝ國へぶく

たる左品（ホン）ゝうへゝのぞこうるひるく成侍りぬ

（来迎引ぶとまうこと）

きぞ今きそぐたうるはちゝ式るちこぐる社

うゝいよべるで水草きよるゝ山ゝ末ゝく侍とめ

侍ゝくくるゝまのうりぬる

七六

四八水草き

（はまもけき）妃の

の関いけまでまれゝとふこに

うまうりこゝり

ひ

ひうりいでん暁ちうくゝ式ゝ今ぞ水草よゝ爰ぞ

（爰）

ちうするこて月日のきたり今をはん月はこさ

（死去者を云ふ縁にうく）

らにるゝちうまりうまりへよりゝ人ゝうめてゝはけ

（服をきゝ生にも及ぼぬとも）

うちのこうもにこるにのゝはきの人きぐ吾身を

変化のりゝと見ゝ老法ゝけゝあこそ功

徳をにうり行へゝしよゝけきうゝこうへこそ仮世

式わすきゝ行ゝるゝ（極楽思）ぐひ侍る所ゝだよゝうり侍り

（対面）

なぞう彫ゝずゝ（姿）めんを侍りゝむきのこのゝ

（彼岸）

ゝにうりてどくあひゝんこゝ式ゝだゝ世さて

この社に参りて、箱に封じたる祈文どもを、大きなるぢんけ[四]ぶくろに入れて、ことごとに走りすだれ、月は十四日なるに、草ういりまつりはるまでつかまつりて、ものさび山に入るべし。

つもりぬるのひるのさま、月城殿、くるるまで、侍りあむ。[左公をさしたる]

姫君三名をそなたの人のくるべし

[浄土]世はすべて出なまへあるべしの作る所まくるこたいあんをありべしとぞ。

△柏木見物

女三宮をはじめて見奉りそめ侍りのことは後に

侍りのことは後に

みうきがはら

もとつねの君がきはの君がもとに

みぎるもあるべしやいふ

もとつねの君がきはの君がもとに

一日ののぜにさろまうでて、みのさのほ[六条院の御願寺]に、わけいりて、ふべしとうりぞちこきくしあたりけんうれゆ[さうけて]るべうめくしし侍るまとこうきく

よろにみくをあぬばまをもけまで長保元年高大花の夕

△小侍従のかへりこと

[円融院一周忌]一日を法華会あんあざるるうとゆるし

おくしざうし式部丞[女三宮をたのみ]みぐるもあるべしやいのにあるべしの

このゆしやとんをうにはしりとうたく

今さいに文ふみいでう山ざくらおよぐ枝まこと
ろこのけおとこのひあるさこと試とあり

○源氏君 朧月夜の尼に逢ひ給へる所

日下 九十二ウ

あるべきものをよろにおこるあやすき浦よりほれ
しを誰ゆゑなくに世はさびあるを試
仏おがりひけめくく今までわくまさてぬるくら
をしさ試完しすてけと之さりぐ池にこうう
はちにるはとあはさに身人形ど桜
くさてくりり

○朧月夜君 源氏のもとに

日九十二ウ

ひとけなくさよとそ身ひとけはこそり侍ひ試
わくまぬとけくるはせたくるあむげ
あるはに、いのぐそわりひおくまけむ思ひうに
いさりせ一君 切穴先に普くなるガナ 渇ありえ 侯ハ ぐとこ ネ 恨きるりりぐ
いのぐ思ありり
いのぐ思ありさのこにてこ之。

□朱雀院 女三宮の御母

日九十六ウ 秋頃 御ものまくる

こがつの行くてはけ月はすぐる人歌まり
女三宮 六条院の病 五月 ものまくる
けるまやこたるまま委しくおこしはらぬん

念

誦

すけたてまつりたまひ、いのちの世のつたなさ、くやしけれど、かくてありとも思ひすぐしてまほしう、

氏氏の験者のよりしろ

源氏は世の人めあさきをと

うらめしげなるけしきを、

うつろなるものの

ぞ、わがろけまさりたまふ。

紙にかけまつりたまふ

このほどのものの、すこしとしたまふ。

しらせたまふ

あだなるわざにあん。

△柏木忠 女三宮の御ほどを見て長病となりそめたまへほどなく死去にきたるなり

今をかぎりにまかりたるを、

女三宮の

おのづから

らまほしうめでやうも侍らんを、

女三宮の御帳の

じに聞きてとぶらはせたまへ。

わりなきまじ、

いとうとくも侍るかな。

おこりにいとどいうわるけ

ものたまふ。

いまはとてこそえんけうもむすばれたまはぬ

女三宮の御病を

うしろめたうおぼしたる

てんかりのうしろめたうおぼしたる

侍らんとおぼしたるなり。

△女三宮御 うしろ

内七十ウ

うしろぐるしきまで

柏木は女三宮の

はのりのうしろ人とも

内

のいでこの世をすぐれ

あるまじ

いとうとくも侍るかな

くやしけれど、

かくてありとも

せよ、

ものたまふ

ものたまふ

ものたまふ

ものたまふ

柏木は病を

しうの間食事

いとどこのさとり

内

内

内

内

内

只今ばかり参りあしめやすく

氏贈答れ文さあはまさぶさんあを

立ちかくさるやまの紙四ひろげ
けりてくべにおくるべくやき」とある紙に
じけるとたり

△又柏木君より　未期せふこと

円八行
ゆくへ思さり山ぬりまりぬと見田ふあり紙
たちもはるまで空見わきくこのめさせ給へ
氏民部卿
いくのめおくらさせ給ふ人人国紙見いつまでかやまく
まさと見ふとのあ給ひ
すがりありてのひるのきさ紙だるよも絶ずとり沙さ
せたまへ

んぞ　ちらくあり
ひとりせるく侍る
さるこだかりまあん
あるべとろを

円ぐい北方へれ
ばまもせく

□朱雀院　芸三文の院方、筆とろろぐと。
横三十ウ　まるせうとてくまるはあ。
春は野山霞をたもくしけきぐ心ざしやのくほり
いぐまをく侍る　ばのりに乗む

世紙わるを入るん見をれるとをれるで歌見もた
ぐまよ　女三も尼にうるまばうくのまま
ぐまよいとのうるよわざにあんある

□冷泉院　八月十五日の秋、六条院へ
鈴十二ウ　まるしせうるはあ。
雲ぐいう城のけさるあをたるすこのにをりのわすを世
ぬ秋はよの月。同ぐく思」とさこ〜ぬくを考云

□夕霧　落葉文紙はきこして、
ばうけけるはん。

ほろ蚊
をの尾ら
昔さぐ
ひあらう

対をすゝこたや
しに久おりやうり
ゐるおもをくし
ゝり

せくあらふ水嶺さぐ
ゆくん山河の

廿八オ

五しひ絃つまを高き袖に水ぐめ行さく音こゝろの
らまどぼくうれ（ほう）ゐる弄をとこのむ心
たぐびあり名
ゐぐびゐこゐん

○又同忠より

曰廿六オ
あさまの一こさに
つまゐきにゐりてゐりてまワれ
ゆくひるゐるゐ

音伎

せくかゐふ滿くぐ足ん山河ながる元名をたゝ法ぐ
○落葉文陣 母陣息所陣 うゐりこと

曰ウ
たけりげゐく
をりゐてゐ
ぬさまにゐりめ

居翌方にゐりて
うゐくくしの
花ゐ病気を落葉
ゐりにて侍るゐ
わゐ
ゐまぐ
ゐまぐ
ゐま

□朱雀院（ゴ息所の）（落葉の宮を法皇にうつしまつりたまへる所なり。）

ゴ音役

○雲井雁（夕霧の息落葉の宮に心を尽くしたまひ、ゴ息所乃）

□四十三ウ

□七十七オ

上月

□致仕乃大臣

らめ　とさく　ほやと　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

□秋好中宮（紫上の養女、春宮の御母）　法廿一ウ

このまに　はつる　鶯　紫上の春にんをよみあひしるく

ぶ　めぐりけん　いつもなれむ　とわりに　しらま　侍ぬる

□紅梅右大臣（白氏文集の句による）　梅十三ウ

花　と　先　この　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ぬ　やちらさん　とす　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

このに　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

○薫君（匂宮の姫君をけさうし給ふ。夜侍ふ）

竹十四ウ

よべ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

（ちらばしにも　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ）

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

（ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ）

竹河

○夜侍ふ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

よべ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ものごとをぞうやくふ

あるべき　仰云べきハ〜なるべし後世の人のやさしき心ばせのぎりあるべきなり

式部丞まひあつうかどにうけ給はりとぞ
をきこりけるに式部丞のさ世紀とぬきらもし
くなむ」とぞ申けるに

□夕雲君　曰しれ物思ふ〜世の事なり

曰ウ　みぞのうへを乗るべきと思ふ人はいとい
ぶれ待うてなむをせ給ひとどめ給ふ　雑役
らすうとのうしぬ〜ぬ〜のはせ給へ

○蔵人少将　曰しれ、蔵人、まかり〜世けり

曰廿二十才姫君の後へまかり給ひ少将
今をこのぞうと思ひ侍るいのちはさきどのに

おぼえあはまてこれりはとばのりぞにひきこそ乃老
るはせぞうまにあけとめらまてく老ぼ一文彩の
らへやせん

○姉姫忌法ことの

曰ウ　あはまてふ法まは世ひとこと見いろ彩ひと
にこのくるりはぞうそ。ゆ〜しさこの老とにてるんかはのに
思ひ〜つとやとく」このさ彩ひとく云〜

○又蔵人少将より

曰廿七十才　たこぞ名をたこぞ」仰どのごとぞ〜〜て

たゞ名ハ

いかるせんとあにきんにてるのさすがおのでやーまんの
見ごのひとくとそのはうへくまのけの出きばんれわど
ハと思ひまへまーしのびひこみちにえいろごのま侍
らるーしまどあるよ云〻

△薫君（せうたいう）

橋姫十

はーしひめしくくうあ侍さすさをのーしくくよ
袖ぬるまぬるかのあたまふんのーとて云〻

△大君病

同廿オ

さーこのるる宮治つ川長あをゆの事や袖ぬ

宮治の川長

はつーん者さうおくーしいとおのーしげよの事
まーり

□のをるけ見（大ぶたきて終る 九女）

同廿オ 桜木にやながーおさんくそやさ

うらはくるかるやうくやまあいかよくとめ侍りくうと
つと見へのるを見くるーまわざるるむこの事はーき
こてはたるやうにかりもみすけるへ見ん
すくわがーゆる貫ぐくまん浮山ごをりはて侍
らいは日かぐ見うけ見ねはりたきくーしげをのり
よくうーそ見こ姫ふにおりまをそんはーまんとくうり
書けるのひ見ぬはる侍ーん

故柏木忍師母

[illegible]

四十二才

病をおもりくるしみてまろにしるしのつ
いきをさそうてむとしのくなるぬるたのしみ
思ふことをうひる事りはこのくもをのぼりく
おはまをんがさを[illegible]このうりさと絵み
ちはくふこのみ[illegible]ふ[illegible]
ゆくりはあるれやこにのまくく
めれまへに此恋絵うもく[illegible]ようてわの

たまのぞこの月しもとまるはーみめぞくしくさく侍る
二条はれおどくを[illegible]うーろめてう思ひ事とものおるこのうこ
をなけまでく
いけちあくぞうまとを見る一人きで岩根よ
ゆあーし松れひ未のきけ[illegible]やういとみぐう
ぐはうて侍れ思にとうくにのきにそくろ

○白菊

推七十才

山ぎくくるまほ小あるうに弱さて同ーぐ絵好
てくくの孔野ものまーとやをけん

○八文字屋うりこと

上同

ぼうし咲る花はさかりに山のぼれ垣根咲る丞

は旅人野辺咲わたり見こと花のしげらう

らうらうかさあてり

□句 文 しぶれ山里 字名はは中元に。

同 廿二丁オ

咲しの外く松は山里いの外ん こはぎの家はの

はゆふぐれたるぐ今のうれはしき咲はがしらぬ

ほうん人をあるかんばさ外くうあぐはきい

世四

もゆくはべをわうをく彩のめうるはみなん

■同 忌 字法より同のこきうまざれく山里まざのまに藤ずいろ者に

同 廿四丁オ

あさ夢に夜あまどはせる藤はまた咲のうにやき家

ぶうをおくをうこ忌はたるまづくうこうあき

ぶく云く

△蓑 こい 大ろはれるきを。

角十九丁オ

はきびはわこのはこうきぶみの外人をいのに風

侍ん

△大忌 師はうこと

同ウ 父まは服をぬぎこうのはるるいやまにのりく見ん まどひにも

今きとてわぎすて侍りとほどはんまどひて

みぎりぎりひとまつ
ゝでまもりはまち
侍る

ゆくゝしげゝゝ侍りけるもの、ゝ
□このをるれる
四十四ウ
よべまあんと思ひ
大男ゝゝゝゝゝ
まるゝ以ゝ
今程いざゝゝ
伏
ゝゝゝ
れゝたるげゝ侍
やすゝはまゝ侍る
見合て
□あぎり
早 二十ウ
ゝあゝゝまりて何ゆのれゝ
白ゝゝ
三日の暮大ゝ
ゝ
ゝ

□若紫之巻　寄世二十才若紫はさうらに代ゆきてきこゆ　六条殿の白こと
なりのつれみし。
さうらにいとさに侍ぬ　侍ぬ　のやまと
とそ　をのきはぬしまれこ三位ふえうわこ　ものもの
あやまるしげこ　ものもむ

紫の上をれぶまゆる　物所　いのに　歪　げる　ぶ　ぶ　ぬ

○中　君　おるぎきこまほ
同世ケウ八年　北山　年　あぶり　れ　けこ　たり　に　こ　はう　ぶ
一ト日　北山　年　あぶり　れ　けこ　たり　に　こ　はう　ぶ

行こさ、のくるれんれかどう名　ぶ　の　ま　ぶ　の　ぶ　い
昔を思出はぶきをおき人のゆくあつけてもの思つけて其のはんの行こうあり
このにいとほしくこえとれ、そひそるべらるこに見かろ
ぶ　ぶ　ぶ　

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たのもしきかぶのまつりうた

まつ海ぞ海ぞ海

いつでまづうつ
きまるそさ花あ
きうあむ

△常陸介の方

東十九ウ

すべてくゝ侍しでさうの事くゝくとのことま
里てえとりてひつるるこに毛ことさせぬ城つ
けしぬさことと侍りてもばゝ所ぐさせんと思ひ
ふるこにひとしけびくさぶひぬぐきこのこれ
れいそくいとゝもくうきくなむこゞがけゝぬ
身ひたのこのげきのくれをあくぜえれるこ
けれえれかくく侍世ゐまぎたけりきこゝに

四十一

はゝまたあはとうちはきけかてるふみ城云く

△大蔵よりれたのりこと

四廿丁オ

かきれ行ぎこけて
大蔵ごかなる文

きうくきこのれるたいきのくろへたる所しいぞく
きけゝけこ東たるあくねぜろ
うとぐこのしけるめれどきてもすぐい給ひつづくハ
ちはもとなゝまぜとく
ちばゝけまぐくひけうはけ

隱

仕西て侍三六と

ヲ音伎

□常陸介むこの中将

十二ウ

うえ城けく小林ぐをさくあくて世ハあのもんけわのぐ
あくまいいのぐでぐけうおくてさ世あきくめんけ
とけきり

浮舟はけ母むるこたけきるこ
けあこれとをきれにのぐ。

小家

○浮舟君はそらく　浮舟君の入水しぬと思ひ
いこのにつ丶　にみるはぬ人ちゝ　行つゝんしば。
たゝへのびるとも　まとひ所なく
しばしるてゝ　ゐへ。

○浮舟君れ　のつりて
（ウ）　ぶとうぐこうりてんやすくとかなうぐまてうらてし
（ウ）　（ウ）　のんやすくきん
ひぶ　ぶう　行　ほ　世　に　ぬ　ぬ　と　思　ま　ぶ
□同　君　れ　そ　浮舟君の母君
（五十七オ）　（五十七ウ）
つゝみ　そこの　ゐとて　こと　のこ　に　君　あ　く　ぐ　る　ふ　ゐ　此
忌違
ぐ　ち　も　ゐ　や　し　き　小　家　に　ち　ち　へ　る　は　し　夢

四十二

ぬ　い　と　ん　ぐ　る　し　く　す　こ　ち　の　さ　ば　だ　ち　ゐ　く　ま　ば
浮舟君
こ　の　ば　ち　と　に　わ　ち　く　ん　や　す　の　ち　べ　き　ば　ち　ま　の
（浮舟君）　（荒々しき山路）
よ　ま　ち　に　ま　ば　や　す　く　ば　ち　す　く　え　ち　ま　ち　で　れ
（荒々しき山路）
ま　て　待　し　て　よ　こ　ゐ
□この浅ちの　宇治ちう京れは家に
（ひとしう）　（なてまちうの方は文）
（日六十五）
ま　ぐ　ち　り　ゐ　ば　ぬ　佛　れ　は　ぐ　り　ば　ど　み　ち　ま　ん　れ
（ひとしう）
こ　さ　く　ば　け　ふ　ち　ち　ま　ち　日　ち　り　け　き　び　ま　ち　ぐ　り　の
（ちれのぐりうぐ武とうの）
（モン）
待　り　て　み　ぐ　り　ぐ　ち　ち　れ　ば　や　の　ー　き　に　ま　れ　ま　ち　ま
（物）　（忌）
ま　ば　け　ち　ば　ば　ま　ん　け　ま　ゐ　す　こ　ち　に　て　つ
（今日）　（明日の宇治にたまたまんとそ）

□浮舟君年比わたし、卯槌をうれしき君にまゐらせうと、
浮舟ウ遠ミ　いてゆ中君比方に文をまゐらする文

わがつゆのかくてどーーー

いとくちをしきことなれば
おかしかるべくもあらしかし

□「白」

（ほ母を石山にまうでさせんとて、京より舟にのせむとせしに、人々も送りに出でたりしに、母ぎみの云ひやりたる文）

月日

よべよりはげしかりしを、世行ひて、まのあたりみたれはべりし、
物忘れしたるこころ、美濃みとわびつつ
見てさ世行へまこぶ人、ばこのりたる、まぜたまふ
そく知んりのいみにて侍る、逢ふ、ふるをしく
色はすきまくびけやうにみるてまはせり清

□大文字

月世八ウ白文字は、うつくしき書

伊勢

（京明石中宮代詠歌、白まるまるをせ
ふるるほかみ）

よはのはなつのあるに成るまゝ、うたがさしも

陸奥の国より見せたる
い紙をもむかを思ふ
さ絵かくる

水まさるもとの黒人

あるくまるつしくもとまり中とまへ久しう文ゆりみ
（義しゑなり）
（三月のつゆ）
（ます文元四に人）
（ふるまるまるとこ）
沙汰成るまじきやうに云
□の知るれば思ひ
月四十四丁オ
（ふるまるまるとこ）
（ふるまるまるとこ）
思ひ出のしくるうにあ
（ふるまるまるとこ）
（ふるまるまるとこ）
（ふるまるまるとこ）

加茂古今物名に、
所名本の雲は
まゝさに有ほ
きけどえこうも
まき伝ふとも、
うけ玉小櫛にこ
ゝ言長けど今
せず、

□宗祇君 白えまのゝ
日四十五才 ちさと。
このさとゝしはまとせの冬にうきて世間
はみ水見るさばやまとるばとゝ
云 ゝ
□このおもてる世ゝへ宗かへ法のゝ
日五十二才 芭蕉ゝ法ゝ
こぎゝり上田人侍る世わる さはりて花やくく
郭公此かゝしけくゝしゝのゝさまいうかゝゝる
能とあり、
□白 文 芭蕉法
日六十三才

人生四五六世絵多

正四位中将を源せんとのゝ
しのゝおかりたゞよひ風はるひ水さそはるもやとまつの
めゝくゝあもいとゞ
□う城るはる 白こえはけるをきくはなそはのの
日五十七才 かとはつうのはゝけるはな。
郭公ゆるゝるゝ長ゝ び赤はまつ侍ゝ山ゆき
思ひけるうしへ人 わゝはは世絵ゝ
□白 文 宗かへ法
日六十三才
うは歌この郭ゝ郭ゝ
盃ゝ
き見ゝ
ゝ
ゝ

その夢のもりはてぬるまどろつる夢ものや

立ちうとをる人の
ルうりと【孟津抄】
に者と世三ちゑ
り此夏余ゑ〆と
しやゑさもある
ア、

四十七ノ

□浮舟れそく（浮舟ゑみみむるげんと一ゆ者おもき 夏ゆくゑくたくうきたかすつる文）
孫ゆる和代夏にいとさらづのしく見し移ひたまバ
才種所ゑせさゑ（浦）ゑ侍るゆがくう代夏
ゐちゆ毛ぎゑけるけまやたゞ今ひるねし（故ゆ ちゆ）
て侍る夢に人の（浮舟のこ）
ぎ（ゆ）ゑうさ移ゆ（使き）
紛へ人はゑまし（宇治の山里をれだ）たゑ代（夏）
ゐ世給ゑ人代ゆ（カヤ）ゆゐ（浮舟代ゆ）
しげゑ世せゑ（まりたきをゑ）ゑ移ゆ（浮舟代ゆ）

四十六

あかつきふまどろ
ゐれ侍ゐねゑゐや

ぎゑ移ゑ夏世紛へ（宇治のこ）
（阿代代ゆ）
将代ゆ世ゐ移いと人ゑゑゆげゑ移ゑ（姓）ゆゐ
て移やゑ侍ゑゆ（宇治のこ）
（光陸分にうゑゑゐゑ）
いゐゐ（ミ）くいゑま侍りて代ゆ移ゐ代ゆ者に世
移ゆ移世さゑ（料）たゑ代ゆて夏移ゐゐ移ゑ
ふゑ移ゆゑさゐ移へゐゑて来ゑゐ

□同し人（同じもうまと 代のけ移ゑ文）
（蜻二十オ）
いゐ移ゆ代（陸 移代ゆ）ゐ移ゑ移ゐ移ゑ移ゑ移ゑ

ずりのにおうはまきたくこゝちもまいるまでじ
らるゝ侍るなるあこがれはいとたうとくゝもけへ
わるゝせのけんことをきたのくるまでこゝに
むこのゝゆりてんせいを雨ふり侍りぬべくれもこゝ
あり。

■まぼろしの月よたけのをるあるうきはやぎたるしてうしなく
べりけまゝわぞゝはしをこりさるの

○薫衣 浮舟代りにおくなるべき歌なり 基長

月ぼう ひかるきまるまれすれと
あさてるまゝさとも思ふだおよくゝもと思ふ紙ん
もけどまゝびめえくゝきこゝちしてまいく
いのるやうにの海どはまたまふんかしかけかぞ
紙すぐしけるまはのかくひごろこそ重なける
うとぶれるもの七一 加るさえいゝぐ思ひけどもも
このうしかくけくゝ侍る紙思ひけどもも
もぐ見さくゝあぐりに八のるのゝずさるべきこと
にもたべすめく

○浮舟のそゝけのつりこと

四世二十ウ 作 無うて ひとり ものさびしくて

へ行げきこ侍るに このること 本せごく見あべうるる

にやと思ん 寺院を 仏法 ひ侍るとも

まへ ものら 思ん まうさ ぶくさて 紙みを

に 思へ 所 さめ しう 貞 けたとり

志なごく たけこと 所 ろ 世 侍し ふ ひ なく

見たまひたて 今 泊 ひ 四 世名 ひ

のすく 思 ち ぎり 長 て ら く

ひらけび 待り 今 ば ま ご 侍 ば ほ

後撰 ふきまくら

紅葉 ふ ろ に ふ

き ふ ん 式 く く

あ ま ま ま ー や

たけ こ ち く と せ 侍 ぐ お に ろ と 思 た ま ひ る 子

侍 ま て 定 め け る 洞 に く る 侍 り て え ま ま く さ

せ や ら ぶ る ど こ の ま ま り

□小寺相 ものあはれ

四世二十ウ あはれ る ん き

え 法 し ず ん る こ の く て る 思 と 加 ま る 紙 き の き り

小野尼

千十二十ウ 今一度 なれ り 行 し く し 人 き す け あ く す ご い 人 今 日 ま

で を あ る き 去 ぬ ま で こ の り ゆ る 人 を 法 ま ー こ 見

法きーみつるとどこるものそこるわよ社

南よ出さまぐまろう
あるみそ　ぶ八ぬ　ゐ

領
やうじたるものゝさまぬかに正躰ゝゝゝ　僧都なたう
京ゝいとこぐたまけぐ　ゝゝゝ

みづからの
なえさえ
できことも
ありがれど
なをあまた
ゑしたるん

手習君を出家せしにより、てあらざれば、くのうりて、逆ぎせしとあぐきゆとい無茶行ることくく、アとてふ法師の人絵出家ヒもむるハ、功徳あるべきこと、うつりてのさこ手習君ハ、ゑ、ゑ、ゑ

吾あるかの〜ことを
師云さまく吾にうむ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
思ふこゝろ我あるごとく
も意人なりごとく
思はるゝ成まうて
人めをもとゝ。

をゞ師云俗なれこゝろよめんでてこゝろこゝろ
俤新なる思ひのるる高く今をいのであさ
まし　こゝろ世世美（そぐこゝろ成だるほ毋せ世ほ一と）
あの〜こをどこのゝ
この三さ、やり紛ぶ
つゝの世〜と尋
まゞふこゝ伏し〜〜
なほ毛寸紛さちほ毋のるこゝは今まて
へあさ世ほるこみ

師云俗なれこゝろよめんでてこゝろこゝろ
高く今をいのであさ
世美（そぐこゝろ成だるほ毋せ世ほ一と）
こゝろ世世美（そぐこゝろ成だるほ毋せ世ほ一と）
ぐこゝろ成だるほ毋せ世ほ一と）
人めをいのこゝ
こゝ
ぐこゝ世と
山にふこ
（葉にこゝほ毋せ世）
こゝ
紛ぶ
（今まて）
（こゝ）
ほるこ

□源氏君　未詳源氏君にたゝめてあひきこえ
侍まあてたのはーける師文

未世丁オ
夕雪ふるたゝまこえまるごんあるようづやまこゝ
るものひけあめ〜の
（あめはまとるバ為てるるえんをおほせどこのほまをそたに）
雪冒まるる物ほまるごいこのたん
（ーチドオ侍遠ゑたばすーむまこ）
云ゆと解〜」ごるあり。

□冷泉院　秋の比源氏君〜井お桂院よど海せ
あひけるにつのはーける師文、

風世一丁ウ
風ふむ河ふもちる黒なまるごこのたゝ
ぎるけぶるあこのるんゝ
やまーうごるあり。

□夕雪君　落葉まに侍女師悪所の気こ
むまーまに比侍ゑゑーける比文

夕　四十六丁ウ
いちどこうろ
ぶうつのすべきあひぬよのものこ

○陸氏君より以下にさたせるめぐりてのことしをあや
まちくゝ見たるたぐらゝ位めぐ、

小萩の事　畢

大坂書林　宣英堂板